View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

佐藤鐵太郎の国防思想に関する基礎的研究 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	張 万挙
発行年	2019-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第742号
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017059

［37］

氏　　名	張（ちょう）　万挙（ばんきょ）
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学　位　記　番　号	東アジア文化博第 44 号
学 位 授 与 の 日 付	2019 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	佐藤鐵太郎の国防思想に関する基礎的研究
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　陶　徳民
	副 査　教　授　藤田　高夫
	副 査　准教授　池尻　陽子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、「近代日本のマハン」と見なされた海軍戦略家佐藤鐵太郎の国防思想に関する基礎的研究である。論文の骨格は、以下のようになっている。

序論　「国防」とは何を意味するのか

一、問題意識　二、佐藤鐵太郎略歴　三、先行研究　四、研究方法

第一章 佐藤鐵太郎の国防思想の発端―『国防私説』(1892 年)をめぐって―

一、はじめに 二、『国防私説』(1　国防研究のきっかけ　2 内容)

第二章　佐藤鐵太郎の国防思想の形成－『帝国国防論』(1902 年）をめぐって―

一、はじめに　二、背景と過程　(1、陸海論争 2、西洋留学 3、在外研究のまとめ-『帝国国防論』)　三 『帝国国防論』(1、軍備の重要性・目的　2、英国・日本・相似性　3、海軍中心主義－海主陸従の国防体系　4、局地防御の欠点と価値　5、国防三線の展開　6、露国への警戒心）　結論: 国防方針・軍備標準　四、影響　五、おわりに

第三章 佐藤鐵太郎の国防思想の成熟－『帝国国防史論』(1908 年）をめぐってー

一、はじめに　二、日露戦後の陸海軍情勢(1、陸海軍の拡張　2、帝国国防方針の策定　3、日米関係の変化）　三、『帝国国防史論』(1、内容構成　2、軍備観　3、大陸観 4、自強将命、 5、軍備の節約　6、制海権・航路護衛　7、対外政策　8、陸海軍標準）　四、評価と影響

第四章 佐藤鐵太郎の国防思想の完結 ―『国防新論』(1930 年)をめぐって― .

一、はじめに　二、『国防新論』(1、 1920 年代の日本の内外情勢　2、佐藤の国防思想－軍備観　3、精神主義国防　4、西洋文明・日本文明・比較批判　5、ワシントン会議の不合理・不公平　6、大陸観念の変化　7、国際協調・不信・不満　8、陸海軍関係　9、日米関係の悪化）　三、影響評価

終章　佐藤鐵太郎の国防思想の本当の姿－石川泰志『佐藤鐵太郎海軍中将伝』再訪－

一、はじめに 二、新たな佐藤像（1、国体護持、 2、海主陸従　 3、精神主義国防　 4、艦隊護衛不要） 三、おわりに
補論 近世後期日本人の海洋観念と思想的系譜
一、はじめに　二、 江戸後期の海洋観　三、 幕末時期の海洋観　四、 明治維新後の海洋観 五、おわりに
佐藤鐵太郎年譜
参考文献　一、著書　 二、論文

本論文はある意味で、少ない先行研究の中で重要な位置を占めている石川泰志『佐藤鐵太郎海軍中将伝』(2000 年）を念頭に置き、佐藤の国防思想を大陸侵略主義から離れる平和的「島国海洋貿易国家論」として高く評価した石川氏への反論の形をとっている。

序論において、国防とはある範囲の土地や海洋や空を自分に属するものと見なして、他者から受ける脅威や侵入や略奪を退けてそれを自分のものとして維持しつづける事業であるか、それともこの範囲に存在しているある政権或はある思想・主義を他者からの干渉や破壊や転覆を退けて長期的さらに永遠に維持しつづけようとする事業であるか、という問題を提起する。

第一章では、朝鮮半島をめぐる日・清・露の競合の中で書かれた『国防私説』によって提起された「国防三線」論や一流海軍建設論などの意味を論じた。

第二章において、山本権兵衛海軍大臣による「海主陸従」の国防体系の研究という内命を受け、イギリス・アメリカ駐在の経験を生かし、イギリスを模範として日本海軍を中心とする国防体系を作り上げようと唱えた『帝国国防論』の意義を紹介した。

第三章では、1907 年 4 月から海軍大佐となった佐藤は、日露戦争での戦場経験を生かした『帝国国防史論』で島国の日本にとって海防・海軍・海戦・制海権の重要性を強く主張し、満韓問題と国防の関係、仮想敵国の確定と対策、陸軍の主導する大陸政策への批判、艦隊決戦主義および精神主義的国防論を展開しているという同書の特色を分析した。

第四章において、『国防新論』（1930 年）では西洋への批判と中国への干渉が唱えられていることや、日本国体の唯一無二および日本人の国体護持の使命、最新文明としての日本文明の優越性が繰り返し強調されていると分析したうえで、『国防私説』、『帝国国防論』、『帝国国防史論』において現れた国体擁護の論説と対照し、佐藤が生涯をかけて研究し続けている国防思想の出発点と帰結点はまさに国体護持であり、それが佐藤の国防思想全体の要だと指摘した。

終章において、佐藤の国防思想を実行すれば、近代日本は対外侵略の道を辿ることなく、あの戦争を避けられたはずだとする石川氏の結論はまだ検討の余地があると論じた。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本論文について、先行研究が少ない海軍戦略家佐藤鐵太郎の国防思想の変遷を、『国防私説』、『帝国国防論』、『帝国国防史論』および『国防新論』という四つの著作を丁寧に辿り分析したこと、また「国防」の定義を真剣に考え、それを佐藤の国防思想の営みおよびそれに対する石川氏の位置づけなどとリンクして検討したこと、佐藤の国防思想の前史としての近世後期、幕末および近代初期の海防思想を一通り探ったことなどは、評価できる。

しかし、論文提出者自身が目指した、関連するコンテキストの中でテキストを研究するという目標はどこまで実現できているかは、やや疑問である。例えば、佐藤の精神的支柱となっているその日蓮信仰に関する紹介と分析は明らかに不足している。そして、佐藤の四作品の中で最も重要な『帝国国防史論』に寄せた伊藤博文の序文についても重視していない。満州地域に深入りをせず、それを日露間の緩衝地帯として置きたいという伊藤の立場は、「海主陸従」を主張する海軍指導者たちの考え方と一致していることの意義が見逃されている。

にもかかわらず、本論文は、佐藤鐵太郎の国防思想に関する基礎的研究として力がこもった労作であり、これからの研究者にとって良い参考になるものと考えられる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。